

書誌学——その擁護のために（承前）

Bibliography — An Apologia

Walter Wilson Greg

訳 前田貞昭・山本あい

さて、本文研究 *textual criticism* は決して新しい領域ではない——むしろ、新しい領域から程遠い——。そんなものに新名称を与えようとしたところで果たして得るものがあるか、と疑問に思われるかも知れない。これが所詮は言葉の上の問題に過ぎなかったり、知識体系の形式的分類の問題に終わるだけだったりするのなら、そんな枝葉末節のことで頭を悩ませるのは馬鹿らしい。自分自身の立場を守りたいだけのようで気が引けるが、正直なところ、この問題を巧く解決できないと、書誌学者 *bibliographer*・文学批評家 *literary critic* としてはどうも居心地が悪いのである。もちろん、私の言い分には理があると思っている。

〔新しい研究領域に相応しく、その〕方法を含意するような名称があることを前提にすれば、述べたいことは多々ある。また、私は、文学研究において最も重要なものを求めて得た結果と、本文研究 *Textual Criticism* と批判的書誌学 *Critical Bibliography* とを同義だと認めて、〔本文研究の〕方法を転換した結果とは、似通っているとも考えている。もちろん、歴代の本文研究者 *textual critics* が、書誌学的徴証の重要性に目を瞑って来たのだとか、あるいは、かれらが熟達した洞察力を武器にして書誌学的徴証から多大な成果を挙げたことが極めて稀であったなどと、強弁するつもりはない。現存しない原型 *archetypes* の書誌学上の特徴に迫るための——古文書書体学 *palaeography*、丁付け *foliation*、分かち書き *stychometry* 等の観点からなされた最も意義深い調査は、本文研究者によって積み重ねられて来ている。その議論が妥当であるか否かは様々であるにしても、本文研究者がそれらの成果を利用しているのは、かれらが書誌学的データの重要性に気づいていることを自ずと証明するものである。〔だが、〕本文に関わる全資料は書誌学の観点からアプローチしなければならないことを十全に認識している本文研究者に、私は出会ったことがない。卑見では——著名な研究者の成果を批判するのは気が引けるのだが——、二つの基本的な誤りがあった。必ずしも簡単に二つに分けることはできないが、そうした誤りがあったのは明らかである。一つ目は、本文研究 *critical* の領分に属する問題とメタ研究 *metacritical* の領域に属する問題とを区別しなかったという誤りである。二つ目は、本文研究というものその根本が書誌学に属していることを認めて来なかったという誤りである。

一つ目に挙げた誤りによって、純然たる本文研究 *critical* の領分に属する問題や書誌学 *bibliographical* に属する問題を解決するに際しても、メタ研究的 *metacritical* な方法や直観的方法に固執するという事態が生じてきている。書誌学的研究者 *bibliographical critic* にしてみれば、確信を持って、与えられた一節の読みが正しいとか、あるいは、或る読みが決して原文通りではないと言い得るのは当然過ぎるぐらい当然なことである。一方、疑問を残している箇所について、直観を拠りどころとして断定的な判断を下す研究者がいるが、その内実を検証してみると、時として、単に著者が書いたに違いないと主張しているに過ぎない場合がある。著者が書いたに違いないということは、字義通りに書いたに違いないというのが適切であり、しかも、或る写本の疑問箇所を与えたかれらの読みが明証性を

欠いているという点では、現代の編集者の手になる修訂 emendation の結果と大差がないのである（おそらくそれよりも悪質である）。厳密な研究方法が適用された時、初めて本文研究において何らかの成果を生むことが可能になる。そして、それは、メタ研究的 metacritical な方法の介入によって汚染されたものであってはならない。メタ研究的 metacritical な方法には、それが関わるべきでない領域に決して口出しさせてはならないのである^(原注5)。

二つ目の誤りは、本文確定という問題 critical problem が、その本質において、書誌学に属するべきものであることを認識できないままに、誤った角度からのアプローチに委ねたことである。すなわち、正しい本文が再建できるという考え方に基づいて、〔本文の〕読みを、専門家めかした数勘定で誤魔化しながら扱って来たのである。最初は、単に編集者の感性を満足させるという理由だけで読みが選択された。折衷本文 eclectic text と呼ばれるのは、そのようにして私たちが手にしたものだ。著者が見れば呆れてしまうような場合も生じるのだが、編集者の感性が優れていれば少なくとも無理のない本文には仕上がっていた。次いで、おそらく自らの感性に自信のない手合いだと思ふのだが、写本に最も多く出現した読みをそのまま受け容れればよいと発想するような輩も登場してきた。その結果は最悪である。というのも、そのようにして作成された本文は、著者ならそのように書いたことを認めるだろうと想定されるものに近づけなければならないという要請にも縛られないので、筋の通った本文という要素はさらに希薄になるからだ。しかし、このような操作は、書誌学的手続きの第一段階に過ぎない。なぜなら、読みというものは孤立・完結した存在ではなく、その媒体である写本が相互に関連していると考えられるからだ。過誤は、写本群の歴史を検証する代わりに、写本の多寡の数勘定をすることで生じたのであった。〔書誌学的手続きの〕次の段階は、写本相互の関係を研究して、各々の写本が現存する形姿に至るまでに経てきた局面の一々の様相を明らかにすることである。全ては本文推移に関わって生じる疑問の解明にかかっているのであって、本文が転写されて行く過程で形成される写本の系譜が純粹に書誌学的な角度から解明されて初めて、それぞれに異なる読みが、原著性 authority という観点において、どのような相関関係を持っているかが明らかになるということが、現在では認識されている。読みの問題を〔本文の問題を文学的感性に依拠して判断を下すような〕文学的観点だけから扱っている限り、いわゆる系譜法 genealogical method は夢想だにされなかった。たとえ、系譜法に思い及んだり、その重要性が認識された時点に至っても、系譜法の原理や本質は永く不完全にしか理解されなかったのであった。英語文献で最も早くて優れた系譜法の解説の一つに、今からちょうど五十年前前に出版された、ホート (Fenton John Anthony) Hort 博士 [1828年～1892年] の「ギリシア語新約聖書 序文」*Introduction to the Greek New Testament* がある^(訳注4)。しかし、この序文でさえ、その第58節～第59節「系譜解明の方法」*Manner of discovering genealogy* は、根幹に関わるところが決定的な過誤に基づいて書かれているために、〔その系譜法の理解は〕歪曲されたものでしかない。ホート博士のような聡明な批評家なら、読みの類別といった用語を律儀に解さずに、書誌学的な観点に従って転写の各段階という用語〔概念〕を使っていれば、こうした破目には陥らなかったと思われるのである^(原注6)。本文研究者たち critics が異文 variant readings の数を勘定することをやめて、異文 variant readings を全て本文推移 transmission of text の各段階の様相を再建するための徴証として扱い、〔転写の〕全過程を、一定の規則に基づいて書き表わされた記号表現一つ一つの物質的形姿の問題に還元することを原則とするまでは、本文研究の正しい基盤は確立出来ないと確信を持って言っていないかも知れない。

本文問題 critical problem の中心にあって、全てを左右するのは、本文を複写する写字生の書誌学的

操作である。写字生こそが、本文問題を生じさせることに直結する本文異同に対して責を負う存在であり、同時に、本文問題を解明する資料の提供者でもある。写字生が関わるのはそれだけに留まらない。なぜなら、写字生の操作は、具体的な読みの背後に控える広汎な事象に様々な痕跡を残しているからだ。しかし、古いタイプの本文研究者は、文学と無関係であったり文学的価値を持たないような、その種の痕跡には気づかなかつたか、あるいは、気づいても無視してきたのが通例であった。だが、そうした痕跡は、筆写によって本文が継承されてゆく過程を明らかにする徴証として決定的な意味を持っているかも知れないのである。削除 deletions、抹消 erasures、挿入 insertions、転置 transpositions、^{ぎょうちが}行違い mislinings、また、行数に過不足を生じている頁、紙葉の揃っていない折り丁——この種の痕跡やその他の数多くの細部から有用な徴証を得られるかも知れないのであり、こうした痕跡の有用性は書誌学者が見れば直ぐさま理解されるものである。こうした証拠を見事に利用して、紛うことのない書誌学的資質を披瀝した編纂者が時々には存在しなかったわけではない。しかし、本文研究者の殆どは、多かれ少なかれ、本文の背後にあるものについては一切、目を瞑ろうとして来た、と言って間違っていないだろう。

一方に書誌学 bibliography を置き、他方に一通りの実践を踏まえた本文研究 textual criticism を置いて、この両者の関係を考えようとした場合、もう一点、注目しておきたいことがある。それは、決して〔両者の在り方の〕基礎的部分に関わることではないし、ここで異論を差し挟まなければ、対象へのアプローチの角度の違いに伴って生じるに過ぎないと見做されてしまうのだろうが、上述した相違点よりもむしろ重要ではないかと私は考えている。一般に本文研究者たる者が関わることとされ、また、実際にかれらが全関心を注ぐのは、本文編纂の問題であり、著者の書いた原文の再建である。本文研究はそれ以外の本文推移の全過程の様相解明も対象となし得るのだから、本文研究者が自分の仕事を本文編纂・原著本文再建といったような領分に限定しているように見えるのには大した理由がないのは明らかである。少なく見積もっても百件の内九十九件は、本文研究者が編集者の要求に支配され、研究領域の或る特定の点にしか興味を寄せないところに留まっている、というのが実際のところなのだ。他方、書誌学者は、そのような偏見に囚われなくて、本文〔に関わる諸事象〕全体の歴史に関心を向け、著者の書いた原文さえも本文推移の一つの段階に過ぎないと見做す。著者の書いた原文は最も重要な段階であろう——否、たいていの場合、唯一の重要な段階である——。しかし、書誌学者の関わる仕事を厳密に検証すると、そのように〔著者の書いた原文を最重視して〕考えることが正しいか、否かは疑問である。書誌学者の仕事は、或る本文が今日まで継承されて来た様相を徹底して明らかにすることである。私の論理は説得力に乏しいように映るだろうか、そうでないことを望んでいるが……。文学を少しは距離を置いて眺める機会が僅かでもあれば、文学の世界では、派生本文 subsidiary text が著者の書いた原文に等しい価値を持っていたり、あるいは、それ以上の価値を持っている場合を想起できると思うから、こんなことを言うのである。例えば、ジュエル主教 Bishop [John] Jewel の『英国国教会の弁明』*Apologia Ecclesiae Anglicanae*〔ラテン語版1562年刊行〕に関して起こった浩瀚な論争は、ラテン語の原文に拠ったのでもなく、また、最初の英訳本文に拠ったのでもない。レディ・ベーコン Lady [Ann Cooke] Bacon [1528年～1610年] の英訳 [*Apology, or Answer, in Defense of the Church of England* 1564年刊行] を、論争の両陣営が共に権威あるものとして受け容れていたのである。ほかの例も思い浮かべられるかも知れないが、〔そうした例の中で〕最も代表的なのはウルガタ聖書 Vulgate〔ローマ・カトリック教会で用いられたラテン語完訳聖書〕^{〔訳注5〕}であることに疑いはないと私は思う。〔ウルガタ聖書のラテン語訳に当たった〕聖ヒエロニムス Saint Jerome [340年頃～420年] が実際にどのように書いたのか、あるいは、彼が書き記したところに出現している神聖な精神が

何を意図していたのかを決定しようと、多大な労力が絶えることなく費やされて来た。取り分けて言えば、9世紀のアルクイン Alcuin [732年～804年]^{〔訳注6〕}の仕事、11世紀にはラフランク Lanfranc [1005年～1089年]の仕事、12世紀にはスティーブン・ハーディング Steven [Stephen] Harding [1060年～1134年]の仕事があった。ルネッサンス期が到来すれば、ローマ・カトリック教会公認のシクストゥス版 Sixtine 聖書 [1590年]とその改訂版であるクレメンティーノ版 Clementine 聖書 [1592年]があった。そして、今日においては、ワーズワース [John] Wordsworth [1843年～1911年]とホワイト [Henry Julian] White [1859年～1934年]との努力を見てきているし、さらには、この書誌学協会の副会長の一人だった、故ガスケット前枢機卿 Cardinal (Francis Neil [Aidan]) Gasquet [1846年～1929年]を委員長にして始まったベネディクト委員会 the great Benedictine commission^{〔訳注7〕}の成果をいまだに待ち望んでいる。この終焉のない課題に数世紀にも亘って注がれて来た学識を貶めるのは、分別を欠くことかも知れない。しかし、その目標は専ら理論的なところに成立するものだと言えるのであって、歴史的・文学的観点に立てば見当外れも甚だしい。中世全般を通じて、聖ヒエロニムス聖書の影響は極めて大きく、巨大な山頂のように屹立していて、他のいかなる聖書もその影は薄く卑小なものに見える。しかし、中世の人々が手にしていたのは聖ヒエロニムスの本文 text ではなかった。かれらが手にしていたのは、数世紀の間には写字生の転写の不手際や的外れな補訂が介在するために、大なり小なり正規版から逸脱したところを持つ、些か質の悪い本文であった。本文問題の観点に立つ場合でも、あるいは、もう少し広く文学的な観点に立つ場合でも、批評家が自分の研究の本質を弁えていけば、中世の著者の作品を取り扱う際には、権威のあるとされるウルガタ聖書 Vulgate もしくは現代の校訂版に依拠せず、自らの研究の本質に従って、事情が許せば15世紀に印刷された本文、あるいは、ほかのものよりは少しは優れたところのある13世紀の写本を用意する。本文推移過程 textual tradition から言えば、研究者にとって重要なのは、原著者の書いた原本ではなく、研究対象としている著者が馴染んでいた本文なのである。同じ事情で、エリザベス朝文学の研究者は、欽定訳聖書 the Authorized Version of the English Bible (1611年)で満足できるわけもなく、少なくとも主教聖書 the Bishop's Bible (1568年)やジュネーブ聖書 Genevan Bible (1557年)程度は手許に置いているに違いない^{〔訳注8〕}。

本文というものは、本文変容過程で生じた不完全なところを取り除いて、ひとたび本来の純粋なかたちに綺麗に復元すれば事足りるといった固定して動かない、枠に嵌まったものではなく、実は、世代を超えて継承される生命を有する有機体のようなものであって、原著者が付与した形姿から次第に変容を重ねて行く過程においては、不完全なものであっても完全なものと同じように、その周囲に影響を及ぼす事実を認めなければならない。本文系譜上に並んでいる文学作品のそれぞれの本文は、或る意味ではその一つずつが新しく作られた本文であり、系譜上それよりも前にある本文とはどこかが異なる。況してや、著者自身の手になった状態とは、さらに異なる部分を持っている。しかも、それらの相違は、あちらこちらに生じる。正しく、それぞれの写本は個性的であり、或る意味では、ほかの写本とはまた別の一つの作品である。すなわち、写字生が忠実な筆写に全力を傾けようとした場合でも、我流の修訂 emendations や校訂 improvements に熱心だった場合においては尚更のこと、限定した意味ではあるが、写字生は第二の著者と言わざるをえない。書誌学は、偏見に囚われることなく、〔本文推移の〕歴史的過程にある、それぞれの本文がその重要度においては等しい可能性を持つことを認めるのである。

私が〔ここまでの間に〕論を十分に尽くしていれば、書誌学は、最も特徴的な部門として本文推移の研究を含まなければならない、また、本文研究 textual criticism がその本質を改めて、メタ研究的 metacritical なものになるまでは、本文研究 textual criticism の根幹のところは書誌学的分析 biblio-

graphical analysis の応用以外の何ものでもない、ということになろう。さらに言葉を重ねれば、従来、本文研究 textual criticism がこの事実を認識できなかったがゆえに、混迷を甚だしくしていたと私は考えている。すなわち、本文研究 textual criticism は、非論理的でメタ研究的な metacritical 方法に依拠することを繰り返す一方、適切な証拠どころか、時には決定的な証拠すら排除してきたのである。モノとしての書物を分析し、そこに含まれている意味 sign を引き出す訓練を受けているのが書誌学者であって、何も語らない書物から、本文を決定するための徴証を全て引き出すことが期待できる存在として信頼し得るのは書誌学者のほかにはない。書誌学と本文研究とが同じものではないとしても、この二つの領域が少なくとも密接な関係にあることを疑う余地は全くない。私は、書誌学者全員が本文研究 textual criticism に打ち込むべきだと思ったことはないし、また、そんなことを露ほども望んでいない。そうではなく、自ら選んだ土地を耕し、そこで得た収穫を、共有すべき資産として蓄えることにこれまで以上に努めるべきだと考える。また、編集者は書誌学の専門家であるべきだと言うのもない。どんな場合であれ一人の人間に対して、編集者に必要な文学・言語学・考古学の細部に亘る訓練を受けていなければならず、加えて、書誌学者としての十分な用意もなければならぬと期待するのは理不尽であろう。もちろん、これは、編集者が必ずしも本文研究の専門家である必要はなく、書誌学者としての徹底的な訓練を受けている必要もないと私は思っている、という意味である。尤も、新しいタイプの研究者たちが、学際的な研究領域を開拓する余地はあるかも知れない。専門化が進んでいる現状を考えると、書誌学的本文研究者 bibliographical critics とでも呼ぶような研究者たちが関わる、本文研究 textual criticism の一部門を認めた方がよいとも思われる。書誌学的本文研究者 bibliographical critics の仕事は、自ら校訂版 critical editions を製作するのではなく、本文推移 textual transmissions の事実を調査して、文学研究を専門とする編集者が利用せざるを得ない資料を用意し、かれらが受け容れざるを得ないような意見を提示することである。そうすれば、実際の出版に際して編集者たちがそれを都合の好い意見と見るか否かは別として、編集者たちが見かけ倒しに過ぎない文学的校訂版を製作するようなことはあるまい。そのような本文書誌学者 textual bibliographer は、写本の彩色 illumination や装丁 bookbinding また印刷書体 typography や、おそらく古文書書体学 palaeography においてさえも——その領域は本文書誌学者 textual bibliographer が対象としている本文の性格によって異なるだろうが——専門家であることを期待されてはいない。これらの領域の専門家である必要はないが、直面するであろう本文問題の諸事項がどのようなものであるのかが理解でき、そして、いかにすれば必要とされる更に深い知識を得られるかが分かるだけの、一般的知識を持っていることが要求される。換言すれば、書誌学に関する一通りの知識が必要だが、とりわけ本文推移 transmission of the text の様相を、物質的形狀とその変容の過程として捉える知識、さらに、そこで生じうる偶発的事象 accidents に関する知識が必須だろう。本文研究 textual criticism の将来は、そのような研究者の手に委ねられていると私は確信している。——そして、本文が、あらゆる文学研究の中心にある、ということも私が信じているところである。

百の抽象的議論よりもささやかな一つの具体例の方が時には分かりやすい。書誌学的方法を文学的問題に適用した事例で、その根幹部分において多かれ少なかれ厳密な本文の検証によって成立しているものを示して拙論を閉じようと思う。

初めに古英語時代の例を取り上げてみよう。それは、故ヘンリー・ブラッドレー Henry Bradley [1854年～1923年。言語学者でオックスフォード英語辞典 OED を編集] による「古英語詩手稿の番号附セクション」 *The Numbered Sections in Old English Poetical MSS* に関する調査である。鮮やかな書誌学的議論の一例として常々感心しているのだが、ブラッドレーの結論が必ずしも専門家に受け容れられてい

ない点と、その結論が事実として確認されているというのではなくて、ここでは、あくまでも方法の問題として提示している点には注意を促しておきたい^(原註7)。現存する古英詩〔1150年頃より以前の英語を古(期)英語 Old English という。原文では Old English poetry とある〕を記した写本の殆どに共通する特徴は、長篇の詩が番号の附いたセクションに分割されていることである。たいていの場合、これらのセクションは恣意的に設定されているようにしか見えないので、これらのセクションと詩の論理的構造とを関連づけることに編集者は難渋してきたのであった。ブラッドレーは、絶妙な創見によって、そうしたセクションの区分は原初的な丁附 foliation の遺風を残したものであって、詩作品が最初に書かれた羊皮紙の1丁4頁仕立て〔羊皮紙1丁に4頁分を記載する〕という構成の原則に対応していると論じたのである。これは、文学的な要素とは一切関係のない、興味深い書誌学的事実もしくは学説である。一つの例を挙げれば、「エレネ」*Elene*〔8世紀末の詩人・キュネウルフ Cynewulf が古英語で書いた詩〕の写本では、作品構成とブラッドレーが提示した丁附の仮説とが照応しているのだ。しかし、すぐに文学的疑問が生じる。なぜ、キュネウルフ Cynewulf は、〈聖十字架の発見〉the Invention of the Cross〔「エレネ」*Elene* は聖コンスタンティヌスの母エレネ *Elene* がキリスト磔刑の十字架を探求する物語詩〕を詠う自作の各連を正確に4頁に分けて、それぞれの頁を満たすように書かなければならなかったのか、という疑問だ。ブラッドレーが想定したように、単に、キュネウルフその人がつむじ曲がりだったからだろうか。あるいは、古英詩 Anglo Saxon poetry が聖句集と同じ規則に従って構成されていたという、奇妙な照応関係の証拠をここに見出すべきなのだろうか。この謎の答えを私たちは手にしてはいない。しかし、古英語で書かれた宗教的詩篇の中で、最早奔放な詩才によって創作されたのではないとブラッドレーが言うような作品にあっては、こうした拘束力が強く作用していたと見なければならぬことは明らかだ。

中英語期からは一つの例で十分だろう。書誌学的探求という点では、奇妙なコットン写本 Cottonian manuscript〔Cottonian Library / Cotton Library は Sir Robert Bruce Cotton に始まる蔵書群。後に British Museum に移管〕以上に好奇心をそそる例はないと思う。現在、サイクル劇 cycles^(歌註9)と呼ばれる、四本の中世奇蹟劇が伝わっているが、その内の一つで、誤ってルードゥス・コヴェントリエ *Ludus Coventriae* の名前で広く知られているものが、このコットン写本に含まれている。用紙の透かし模様 watermarks や、繋ぎ言葉 catchwords〔写本の場合は写本の折丁末に示された次の折丁の最初の言葉。刊本の場合は、頁末の右下隅に示される次頁の最初の言葉〕、削除 deletions の形跡など、技術的な細部から写本を注意深く観察すると、写本製作中に相当量の加筆や順序の入れ換えが行なわれていたことが分かる。他方、作品構成の面から見ても多種多様な要素が一つのサイクル劇に纏められていて、そうした操作は、現存する写本が編集される際に行なわれた可能性が極めて高い。また、欄外に書き込まれた写字生の入念な注記——例えば、3人のマリアの関係図やノアの方舟の寸法に関する注記——から、現存する写本が読書用に製作されたものであって、上演用でないことは明瞭である。すなわち、私たちが手にしているサイクル劇が、どこで、どのように上演されたかという問いは、全く意味を成さないことになる。同様に、様々な情報源から得られた多様な上演データを整合させようとするのも、全くの無駄ごとである。しかし、いまだに、文学史家は、サイクル劇がコヴェントリー Coventry、ノリッジ Norwich、リンカン Lincoln あるいはベリー Bury と深い結びつきがあるのだと論じてみたり、また、旅芸人一座が一つのサイクル劇を二つに分けて、それを毎年交互に上演したのだ等と言って、余計な混乱を生じさせることを諦めていない。

16・17世紀においては二つのささやかな例が眼を惹くだろうか。ガブリエル・ハーヴィー Gabriel Harvey〔1550年?~1630年〕なる稀代の人物を中心とする悪口応酬の詩 literary flying は、学生たちに

は馴染みの深いものだろう。しかし、論争の詳細は漠然としていて、歴史家の間では永く解けない謎であった。グリーン [Robert] Greene [1558年～1592年] が自作「成り上がった廷臣のための警句」*A Quip for an Upstart Courtier* で偶々ハーヴィー兄弟 [兄 Gabriel Harvey、弟 Richard Harvey] を攻撃したのだと、この事件の当事者であるトーマス・ナッシュ Thomas Nashe [1567年～1601年] が断言しているのを、私たちは知っているだけであった。困ったことに、件のパンフレット「成り上がった廷臣のための警句」には、ガブリエルの悪意に満ちた反撃 [を呼んだ理由] を説明し得るようなものを見出すことができないでいたのである。ところが、マッケロウ博士 Dr. [Ronald Brunlees] McKerrow [1872年～1940年] がナッシュ Nashe 著作集 [*The Works of Thomas Nashe* 全5巻、De La More Press、1904年～1910年] を編集した時に、グリーンの著作の元の本文二丁が差し替えられていたことを明らかにし、そして、攻撃的な一節が存在したであろう箇所を正確に指摘したのである。十年後、オリジナルの状態の「成り上がった廷臣のための警句」が出現し、マッケロウ博士の推論が完全に正しかったことが証明されたのであった。ただ、削除された一節の長さが推論とは異なっていたのだが、それはナッシュのもともとの記述が正確さを欠いていたためであった。

二十年ほど前、ケンブリッジ大学出版局 the Cambridge University Press でボーモント Beaumont [Francis Beaumont 1584年～1616年] とフレッチャー Fletcher [John Fletcher 1579年～1625年] の共作戯曲集を製作し、それにはケンブリッジ版編纂者が初版だと判断した1637年発行の『兄』*The Elder Brother* の複製 [翻字本文] reprint を収録している。ところが、1637年発行の『兄』には二種類の版があるのだ。両者の本文は非常に似通っているけれども、一方の標題が大文字 capital (upper-case) で印刷され、他方の標題が小文字 small (lower-case) で印刷されていて^{〔訳注10〕}、両者は容易に見分けられる。この内、ケンブリッジ版編纂者が複製 [翻字] したのは小文字版の方である。ケンブリッジ版編纂者が何を根拠にして、そのような判断を下したのか、私には全く分からないのだが、17世紀の印刷書体に少しでも馴染んでいれば、標題を小文字で印刷した版の発行年が偽りで、実際には標題紙に見える日附から二十年も後に印刷されていたのではないかと、疑わずにはいられなかった筈だ。とはいえ、このことを実証するのは難しい。偶々、或る時、私も戯曲『兄』を研究する機会に恵まれ、その際、二つの版の先後関係を決定できる明白な根拠を見つけ出す必要に迫られたことがあった。私は細心の注意を払って校合したのだが、私が探し求めていたものは、作品の最後の方までなかなか出てこなかった。“young” という単語を含む一節 (v. ii. 72. 第5幕2場72行目) があるのだが、大文字版では、“y” の前の字間の詰め物 space が印字面までずれ上がって、行の上方に、アポストロフィ apostrophe “'” には見えないような汚れが附いている。他方、小文字版では、全く意味のないアポストロフィ apostrophe “'” が “young” という単語の直前に挿入されているのである。すなわち、大文字版に偶々附着した汚れを小文字版の植字工が見誤ったわけである。このようにして、大文字版が1637年刊行の初版であることが証明されたのであった。

最後の四例は、シェイクスピア Shakespeare [1564年～1616年] から挙げよう。シェイクスピアの戯曲に関しては、近年、書誌学の本質に基づいた研究 critical works が数多くの成果を挙げているのは、周知の通りだ。さて、既に解決されてから時間が経った問題から始めようと思うが、問題解決から相当の時間が経っているということは、書誌学的本文研究 bibliographical criticism が何ら新奇な要素を持たないことを示すものである。『トロイラスとクレシダ』*Troilus and Cressida* (1609) 四つ折り判 quarto には、穏健で信頼できそうに見える標題紙を持つもの、そして、際物めいた標題に大仰な序文を持つもの——都合、二種類の版 issue がある^{〔訳注11〕}。マローン [Edmond] Malone [1741年～1812年] やコリ

アー[John Payne]Collier [1789年～1883年]を始めとする研究者たちが想定したように、危険を承知で印刷所が附けた〔序文のある〕前附部分は、官憲の命令によって削除されたのだと長い間信じられて来ていた。というのも、序文はこの戯曲が上演されたことはなかったと明示し、もう一方の版の標題紙には上演の記録が記載されているからだ。しかし、つまらぬ文学サイドからの推測は、ケンブリッジ版の編纂者によって完璧に覆される。ケンブリッジ版編纂者は、穏健な標題紙が最初の折丁 quire の第一丁〔紙葉〕leaf に印刷されているので、それと同じように処理するべく、〔新たに附された〕序文と標題とを二つ折りの紙葉 double-leaf に印刷していることを指摘したのであった。序文は削除されたのではなくて、後になって付け加えられたのであることは言うまでもなく、文学的解釈はこの結論に従わなければならないことになる。

数年前、私は、『タイタス アンドロニカス』*Titus Andronicus* に、もっと相応しい例があるのに気づいた。この古い戯曲については、エドワード・レーヴンズクロフト[Edward] Ravenscroft [1654年～1707年]の当時から、批評家の間では、一人の手に成るのか複数の作家の手に成るのかは分からないが、いずれにしろ二流作家が書いた作品であって、シェイクスピアがその古い戯曲の僅かな箇所に天才の手腕“Master-touches”による改稿を施したとされるが、その後、この作品の輝きが誰の手によって与えられたのかを明らかにすることが試みられてきたというのが共通の認識であった。しかし、シェイクスピアに特徴的だとされる一節が、時にはグリーン Greene [前掲、Robert Greene (1558年～1592年)] など二流作家のものに非常に似通っていることがあるので、そういう試みを易々と尊重はできないと私は考えている。パロット教授 [Thomas Marc] Parrot (1866年～1960年) が、シェイクスピア以外に道化 Clown の口に「神様は、こんな若い私が天国に参るような大それたことはお許しになりません」“God forbid I should bee so bolde, to presse to heauen in my young dayes” (iv. iii. 90 第4幕3場90行目)^(訳注12) というような台詞は上せられないだろうと言い放って、当て推量の好例を提供してくれた (M. L. R., 1919, xiv. 33) [*Modern Language Review*, 第14巻、33頁、1919年1月。『タイタス アンドロニカス』におけるシェイクスピアの本文改訂] Shakespeare's Revision of *Titus Andronicus*。散文の台詞の部分に置かれているにもかかわらず、この部分だけで一つのパラグラフになっているので、印刷所に送られた原稿の欄外に加筆されたことはほぼ確実である^(原注8)。パロット教授は、この事実を無視して、純粹に文学的観点から論じているのである。もちろん、その加筆がシェイクスピアによってなされたのか否かという問題とは、別の話である。

欄外加筆に関しては、才氣溢れるドーヴァー・ウィルソン教授 [John] Dover Wilson [1881年～1969年]の推論が、非常に説得力に富んでいたことが想起される。「真夏の夜の夢」*A midsummer Night's Dream* (V. i. 2-22 第5幕第1場2行目～22行目)によく知られた狂人・恋人・詩人の描写部分がある。初版に印刷されている、この部分は、全く停滞するところがなく分かりやすい。しかし、字句 passages が二箇所誤って分割されているために、韻文で必要な行同士の関係が崩れている。しかも、この間違った行割りを行なった箇所を削除してみると、残った部分は順序立って一貫もしているし、意味も完璧だ。規範に外れた行文は、韻文に必要な分割のことを考慮せずに〔印刷用〕原稿の欄外に輻輳した形で書き込まれていたことを示しているのであって、不要部分を削除した台詞が元々の本文であった、という結論に異議を唱えるのは難しい。これは書誌学的地平の論議であるが、この結論はそれなりに確かなものとして受け容れられるだろう。ウィルソン教授は、さらに論を進めて、文体 style の点からも、作品擲筆早々の加筆ではなく、十分に詩的成長を遂げた時期の著者自身の加筆であって、この戯曲が最初の構想から数年後に改訂されたのだと仄めかしている^(訳注13)。尤も、このウィルソン教授の指摘は、書誌学が口を挟むべきではない領域の問題である。

結論を述べるに当たって、その解決に私が個人的に関与した問題について触れさせてもらいたい。

「ヴェニスの商人」*The Merchant of Venice*には、1600年の日附を持つ二つの版がある。その二つの内どちらが早い点という点を巡って、長らくシェイクスピア編纂者の判断は二分されて来た。ジョンソン[Samuel] Johnson [1709年～1784年] やキャpell[Edward] Capell [1713年～1781年] は「ヘイズ・クォート」“Heyes” quarto と呼ばれる四つ折り本が早い版だとし、ケンブリッジ版編纂者とファーニヴァル[Frederick James] Furnivall [1825年～1910年] は「ロバーツ・クォート」“Roberts” quarto と呼ばれる四つ折り本の方が早いと判定している。特にケンブリッジ版編纂者とファーニヴァルは、更に論を進めて、先に組まれた四つ折り本によってもう一方の四つ折り本の版が組まれたと主張し、それに反対を唱える人々は、全く別の手稿を基にしてそれぞれの版が組まれたと主張して来た。こういう事情だから、書誌学が救いの手を差し伸べていなければ、この論争は、確たる結論を得ないままに、相も変わらぬ文学的論議の路線で続く余地があったし、続いたに違いない。本文異同だけに注目するのをやめて印刷や用紙についても〔本文異同と〕同じ程度に注意を払えばよかったのである。すなわち、印刷書体の検証 *typographical arguments* が紛糾している問題を説明し得るのであって、その検証は、問題が印刷所中で解決できるものであったことを決定的に証明したのであった。——「ロバーツ・クォート」“Roberts” quarto は「ヘイズ・クォート」“Heyes” quarto の複製 *reprint* に間違いなかったのである。それどころか、さらに調査を加えると「ロバーツ・クォート」“Roberts” quarto は1600年に印刷されたのではなく、1619年に印刷された10セットの四つ折り本（その内の何セットかは印刷日附を偽っている）の一つであったという驚くべき事実が判明した。1908年には私の考えは出来上がっていたのだが、印刷用紙の透かし模様を判断の根拠とする私の推論に、そのような研究方法に馴染んでいない多くの本文研究者たちは納得しなかった。数年後、ウィスコンシン大学マディソン校のウィリアム・ニーディグ氏 *Mr. William Neidig* が写真による精緻な実証的方法を用いてこの問題に照明を当て、最も疑り深い人々をも納得させたのであった。すなわち、ニーディグ氏は、その10セットの標題紙の殆ど全部が同じ活字セットを使っていることを証明し、さらには、それらの10セットのそれぞれに記載された順序とは一致しないのだが、製作されたおおよその順序を示すことにも成功した^{〔訳注14〕}。書誌学が書誌学の本領を發揮したのである。

似たような議論が、1608年の刊記のある『リア王』*King Lear* の、二種類の四つ折り本 *quarto* でも起こっている。1866年にケンブリッジの編纂者たちは「バター」クォート “Butter” quarto と呼ばれる方を選択し、それが最初のものであると断定した。ところが、1892年のケンブリッジ版の改訂作業前に、アルディス・ライト *Aldis Wright* (1831年～1914年) は「パイド・ブル」クォート “Pied Bull” quarto と呼ばれる方が早いと確信したのであった^{〔訳注15〕}。ライトの方が言うまでもなく正しい。というのも、「バター」クォート “Butter” quarto は1619年に刊行された著作集 *collection* の一つであるからだ。

以上、具体例を引くことで、私は、個別の事例研究が理論を支えていることを巧く示せたと信じているし、また、本文研究 *textual criticism* の書誌学的基礎から、本文研究 *textual criticism* を切り離して宙に迷わせることが不可能であること、あるいは、それが少なくとも危険であることを語ってきたつもりである。

原注5、言うまでもなく、これは、一つの例示であって、さらに広い領域に適用されるべき原則である。極めて抽象的な次元あるいは理論上においては科学的結論として通用するのに十分な妥当性を持っていても、それをそのまま純粋に研究上の問題に持ち込めば災難を招き寄せることを、私たちはこれまでに積み重ねた悲劇的な経験から学んで来た。

原注 6、「[本文の系譜を明らかにする] 手続きは、読み reading が一致するのは、その起原 origin が同一だからだという原則 principle に依拠している。(中略) 相当量の異文群を見つけ出せれば、その異文 variation の特徴に対応するように複数の資料体群 documents に分類・整理し、他の分類・整理群と一致しないところまで系譜をたどることによって、或る資料体群の本文が、唯一の原本に起原を有する共通の祖先から枝分かれした系譜のどこに位置するかを知ることが出来る。」しかし、この記述は、読み“reading”や異文“variation”を誤謬 error と理解しない限り、誤っている。なぜなら、個別の読みが一致したとしても、それが「唯一の原本に起原」を有するとは限らないのは明白だからだ。ここに言う原則“principle”が、実は、どのような読み reading が原著性 original を持ち、どのような読み reading がそうではないかという直観的な知識を要求しているのである。——この原著性 originalこそが調査すべき問題であるというのに。

原注 7、この議論全体の根底にあるのは、曖昧だとされている行分けの本質であって、一文 sentence の真ん中で分けることすらあると言われる。これは書誌学上の問題ではなく文学上の問題であって、しかも優秀な研究者が否定していることは、私も認識している。或る詩のセクションの長さを一様に求めようとするブラッドレー Bradley の議論が馬鹿正直過ぎるという見方もある。「エレネ」*Elene* のようにセクションの長さに概ね斉一性が認められる事例もあるが、原型 archetype の書かれていた用紙が確認できない限りは、これも、また、書誌学上の事実というよりも文学上の論議に留まるのは言を俟たない。私はこの事例の価値を判断する能力を持っていない。しかし、想像力が過ぎて時にその犠牲になることはあっても、ブラッドレーが優秀な批評家であることを疑う余地はない。

原注 8、もちろん、私は1600年刊行の四つ折本 quarto に信頼を置いている。しかし、この部分は、1594年版四つ折本 quarto の正確な写しと見るのが妥当な推論である。

訳注 4、これは Brooke Foss Westcott、Fenton John Anthony Hort 校訂『The New Testament in the Original Greek』(Harper & Brothers、New York、1882年)の序文 Introduction のこと。その第58節～第59節は「the Methods of Textual Criticism」の一部として46頁～47頁に掲載。なお、『The New Testament in the Original Greek』は <https://archive.org/details/newtestamentinor82west> で公開されている。

訳注 5、ダマス法皇(在位366年～384年)が聖ヒエロニムスに命じて、標準的ラテン語訳聖書として訳させたのがウルガタ聖書である(385年に新約聖書、404年旧約聖書を訳了)。中世末期以降、ウルガタ聖書と呼ばれるようになる。ラテン語 Vulgata(ウルガタもしくはヴルガータ)、英語 Vulgate(ヴルゲイト)。

訳注 6、アルクイン Alcuin はウルガタ聖書の校訂本(801年)を作成した。以下、ウルガタ聖書の校訂者たちが列挙されている。

訳注 7、ローマ教皇ベネディクト十五世の命で始まったので文中のような言い方がされているが、教皇庁ウルガタ聖書校訂委員会とでも訳せる Pontifical Commission for the Revision and Emendation of the Vulgate のことで、1914年11月23日設立。

訳注 8、ジュネーブ聖書 Genevan Bible (1557年)は判型の手頃さや活字の読みやすさから、イギリスでは最終刊年の1644年には140版に達するほど広く普及した。初めは主教聖書 Bishop's Bible を「用いていたシェイクスピアも、1596年頃からはほぼ一貫して「ジュネーブ聖書」を用いたと考証されている。」と言う(永嶋大典『英訳聖書の歴史』研究社、1988年5月30日、96頁)。長老派の支配するスコットランドではカルビニズムに貫かれたジュネーブ聖書が普及したが、国教会のイングランドでは、カンタベリー大主教パーガーの提唱で、大聖書 The Great Bible (1539年)を改訂して The Holie Bible を出版する(1568年)。その内、特に新約を主教聖書 Bishop's Bible と呼ぶ。主教聖書 Bishop's Bible は国教会の手で普及が図られ、1606年までに20版ほどを重ねたが、ジュネーブ聖書の人気には及ばなかった(同前、97頁～98頁)。

訳注 9、「天地創造から最後の審判までの、主として新・旧の聖書に基づく数十のエピソードを集大成(サイクル)したものが、「コーパス・クリスティ祭(聖体祭)に、職業組合(ギルド)によって上演された。」(石井美樹子・松田隆美ほか『イギリス中世・チューダー朝演劇事典』慶応義塾大学出版会、1998年11月5日、3頁)。これをコーパス・クリスティ・サイクル劇(サイクル劇)と呼ぶ。「ヨーク York、チェスター Chester、タウンリー Townly、ルードゥス・コヴェントリエ Ludus Coventriae の名で知られる四つのサイクル劇が残されているが、」「ルードゥス・コヴェントリエは、地理的には、コヴェントリ市には属さなかったため、その劇中で言及される略称 N・タウン N-Town をとって N・タウン・サイクルと呼ぶことを好む学者もある。」(奥田宏子『中世英国の聖書劇——神と人へのスペクタクル——』研究社、1984年11月10日、45頁)という。また、「N・タウン・サイクルの名称は、N・タウンで上演された、と写本に記されていることからきている。N・タウンの N とは name の意味で、特定の

都市を指しているわけではない。だが、リンカン市との結びつきが早くから推察されている。現存する写本は一つで、英国図書館に所蔵されている (Cotton MS Vespasian D vii)。1468年の日附があるが、これはあくまでも、写本が大幅に改訂された年代である。二つの受難劇が収められており、ト書きによると、年ごとに交互に上演された。」(前掲『イギリス中世・チューダー朝演劇事典』5頁～6頁)

訳注10、小文字類は下部ケース lower case に入れ、大文字や記号・特殊活字類は上部ケース upper case に収める習慣があった。

訳注11、この二つの版は、British Library の [http://www.bl.uk/treasures/shakespeare/troilusbibis.html] では、それぞれ「Quarto a」「Quarto b」とされている。「Quarto a」の標題紙には「As it was acted by the Kings Maiesties seruants at the Globe.」と上演のことが記述されていて、序文は附されていない。他方、「Quarto b」の標題紙の方には上演に関する言及はなく、標題紙の次の頁から始まる序文「A neuer writer, to an euer reader. News.」の冒頭に「Eternall reader, you haue heere a new play, neuer stal'd with the Stage」とあって、この「Quarto b」では未だ上演されていない新作であることが強調されている。なお、「Quarto a」の標題紙上部の文言は「THE | Historie of Troylus | and Cressedia. | As it was acted by the Kings Maiesties | seruants at the Globe. | Written by William Shakespeare」とあり、「Quarto b」の標題紙上部の文言は「THE | Famous Historie of Troylus | and Cressedia. | Excellently expressing the beginning | of their loues, with the conceited wocing | of Pandarus Prince of Licia. | Written by William Shakespeare」とある。上掲 British Library の「Troilus and Cressida bibliographic descriptions」には、それぞれ次のように折り記号が記されている。

Quarto a の折り記号 signature A-L4 M2 (last leaf blank)

Quarto b の折り記号 signature A4 (-A1, +[par.]1, 2) B-L4 M2 (last leaf blank)

訳注12、小田島雄志訳では、この前後を含めて道化の台詞は、「天国からの？ とんでもない、旦那、まだあたしはピンピンしています、天国からの使者どころか、死者になって天国に行ったことさえありません。」(『シェイクスピア全集』Ⅲ、白水社、1981年1月10日第5刷、56頁)とある。

訳注13、この具体的な様相については山田昭廣『仮面をとったシェイクスピア』(日本図書センター、1998年4月5日、344頁～346頁)に紹介がある。

訳注14、印刷用紙の透かし模様をめぐる Greg たちの動きについては、山下浩「書誌学用語解説 (IV)」(『筑波英学展望』第5号、1986年3月25日)の「PAVIER QUARTOS」の項(62頁～68頁)に解説がある。Greg の論文は“On Certain False Dates in Shakespearean Quartos”(*The Library* 第9巻、1908年4月、10月)で、本論文と同様、Joseph Rosenblum 編 *Sir Walter Wilson Greg: A Collection of His Writings* (Scarecrow Press、1998年)に収録。

訳注15、ケンブリッジ版シェイクスピア作品集 the Cambridge Shakespeare は、W. G. Clark (1821年～1878年)、J. Glover と W. A. Wright が編纂して1863年～1866年に刊行されたが、ライトによる重要な改訂が1891年～1893年の間に加えられた。

訳者附記

訳出したウォルター・ウィルソン・グレッグ Walter Wilson Greg (1875年7月9日～1959年3月4日)の Bibliography — An Apologia は *The Library* 第4期第13巻第2号(1932年9月)の113頁～143頁に発表の後(その要旨は、1932年3月21日開催の書誌学協会 Bibliographical Society における会長挨拶として発表されている)、Joseph Rosenblum 編 *Sir Walter Wilson Greg: A Collection of His Writings* (Scarecrow Press、1998年)などに収録されている。翻訳に際しては *Sir Walter Wilson Greg: A Collection of His Writings* 所収本文(135頁～157頁)に拠った。初出 *The Library* 誌はペンシルバニア大学図書館などからダウンロードできるが、Greg 論文の134頁～135頁を欠いている。

なお、訳文中には、適宜、訳語に続けて原語をそのまま記載したところがある。また、〔 〕内は訳者による記述である。

前号第25号に掲載した掲載した前半部分(135頁～147頁)に続くところ(147頁～157頁)で、前号と併せて当該論文全文を翻訳し得たことになる。